

# 子供たちに七色の虹の花を

浅山英一

花を愛する人の心はその生命のあまり短かいことを嘆ずるのが常である。生者必滅会者常離と古い言葉はいつの世にも通ずるようで、あれほど美しく咲いていた花が、今はもうその影も形もないといつも嘆くのである。しかし、来る季節ごとに毎年花は忘れずに咲いてくれることだけがなぐさめである。

あの花のあの形を、この花のこの色をとめておきたいと希うころは子供ごろにもあるようで、押し花や腊葉としてかわいい手帖の間にはさまれるのを見ると、幼児のうちにもう人の心が育っているのだということを感じする。

大人になれば画や写真にして、色も形も残しておくことができるが、子供たちにはまだそれができない。ところがいいことがある。ぜひぜひ、即刻、子供たちと一緒にたのしんでいただきたい。

## 花びらて絵を描く

季節はちょうどハナショウブ、アジサイ、ザクロ、ゼラニウム、球根ベゴニアなどが咲いている。散る花びらをとってハガキでも画用紙にでも指でもんで押しつけてみる。滲み出る花びらの汁は紙にしみこんでいろいろの色に染まる。

ところで赤やピンクの花びらはやゝ紫色がかって咲いていたときの花色とはかなりちがった色である。これは赤や紫、青などの花色はアントキアン色素なので、洋紙は製造過程でアルカリ処理を受けるから、浸みこんだ花色はアルカリ反応を呈するわけである。それが証拠には石鹼液をその花色の上に塗ってみるとサーッと青くなってくる。

たばこの煙をその紙に近よせてみるとこれまた青に近

い色となる。

次にレモンの汁をつけてみる。見ているうちに紅みを帯び、ゼラニウムや球根ベゴニアの紅い色は緋紅色に変色する。これはアントキアンが酸性反応をあらわすからである。

どこかの庭に黄花コスモスが咲いている筈、またどこかにはオオキンケイギクがまばゆく黄色に咲いている季節だから、花びらを貰いつけて、同様に紙上ににじませてみると、美しい黄色に染まる。

前回と同様に石鹼液を塗ってみるとアール不思議そのとたんオレンジ色に変色する。これらの黄色にみえる花の色素はフラボン色素なのでアルカリ反応で紅やオレンジに変わるのである。ところがレモンの汁をつけてみると変色した紅やオレンジはもとの黄色に戻ってしまう。アルカリが酸で中和されたからであり、フラボン色素は酸では反応を起さないからである。

いよいよおもしろくなってくるわけだが、ヒマワリやルドベキア、マリゴールドなどたいていの黄色い花はカロチン色素の色であるからアルカリでも酸でも変色しな

いで生の花色のまゝ紙が染められる。クチナシの実やサフランのめしべも美しい黄色に染まってくれる。

### 虹の七色が花色で

さて、子供たちと一緒にあちこちに咲いている花、しかも散りそうになった花、散った花びらで、紫、青（路傍のツクサの花で）、紅、黄、などと花色を紙ににじませたら、適宜にあちこち石鹼を塗りこくり、レモンの汁を浸ませると、クレイヨンも絵具も、色鉛筆もないのに紙面は虹の七色で塗りつぶされるのである。ボールペンで籠を描き添え、釣手とりポンをかき添えると見事な花かこが出来上る。

あしらいに菜っ葉をぬりつぶせば緑色で花色が一層引き立ってくる。

翌日になると紙は乾き、昨日よりもまだ美しいパステル調の美しさに我が目をうたがいたくなるほどである。

散りゆく花の花色をとよめておきたいという希いはだれにも叶えられることであり、ぜひ幼な心に花色の妙をしっかりと灼きつけさせておきたいものである。